

音楽
と
美術

この1枚

ポール・デイヴィス
《ウォールデンⅡ》

デザイン界を変えたイラストレーター絵画作品



《ウォールデンⅡ》
1974年 カンヴァス、油彩 58.4 x 101.3cm
©Paul Davis, Courtesy of Nishimura Gallery



THELONIOUS MONK/
SOLO MONK
COLUMBIA 1965年 (LP)
眠りに就く前にこのCDを聴くという音楽家の小西康陽は、「小節の変わり目で、ほんの少しテンポが重くなる一瞬がいつ聴いても美しい」と語っている。

世田谷美術館には、アメリカのデザイン界を変えたといわれる「ブッシュピン・スタジオ」で活躍したイラストレーターたちの絵画作品も所蔵されている。そのひとりがマグリットやアンリ・ルソー、あるいはフォーク・アート風の素朴な作風で知られるポール・デイヴィス(1938年-)である。

その《ウォールデンⅡ》は、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの著作『ウォールデン 森の生活 (Walden or, Life in the Woods)』に寄せた「第12章 動物の隣人たち」の挿絵。オリベッティ社から1976年に出版された非売の大型本である。

木立の向こうに見える水面が書名ともなったウォールデン池で、ソローはそのほとりに小さな丸太小屋を建てて自給自足の生活を送りながら思索にふけた。小屋からの眺めがちょうどこのような景色で、右手には樹液からシロップが取れる白樺の木も見える。

デイヴィスは「オリベッティ・ダイアリー 1974」の挿絵を制作しているので、その縁で始まった仕事なのかも知れない。

また、彼は好んで同時代の著名人の肖像を手がけている。なかでも有名なのはジャズ・ピアニストのセロニアス・モンクのLP「ソロ・モンク」のジャケットだろう。

「セロニアス・モンクは、約束のレコーディングに遅刻したので、他のミュージシャン連は帰ってしまっていた。そこで彼は、ソロでレコーディングした。単独飛行の情熱。」と自作について語る。

全編ピアノ・ソロで構成された作品にふさわしい、なんと洒落た肖像画ではないだろうか。

世田谷美術館 学芸員 矢野 進

担当した主な展覧会に、「瀧口修造と武満徹展」、「植草甚一/マイ・フェイヴァリット・シングス」、「東宝スタジオ展 映画＝創造の現場」、「花森安治の仕事」、「ある編集者のユートピア 小野二郎」など。

音楽
と
本

この1冊

横溝正史

《悪魔が来りて笛を吹く》

横溝正史とフルートの音

ミステリー作家・横溝正史(1902-1981)は戦後、疎開先の岡山から世田谷・成城に移り住みました。名探偵・金田一耕助シリーズの一篇『悪魔が来りて笛を吹く』も成城の地でうまれた作品です。

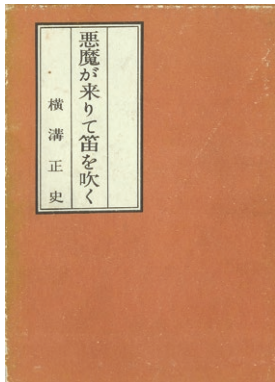
この作品は、1952年11月に雑誌「寶石」に掲載され、2年後に完結。世を震撼させた帝銀事件と、戦後没落していく華族とをモチーフにし、怪しく響くフルートの音とともに、連続殺人事件が起こるというものです。密室トリックや暗号を駆使したおどるおどる世界が展開されていますが、創作のきっかけが美しいフルートの音色であったことが横溝本人により明かされています。

1954年に岩谷書店から刊行された単行本『悪魔が来りて笛を吹く』の「あとがき」では、この作品の成立経緯として、隣家から聞こえてきたフルートの音に魅了され、そこに自身の旧作を結び付けた

ことが語られています。そのフルートの音の主というのが、もとP.C.L.映画製作所の社長子息で、奏でていた曲はフランツ・ドプラーの「ハンガリー田園幻想曲」。家に来て演奏してもらったこともあったようです。横溝は当初、作中に流れる「悪魔が来りて笛を吹く」という曲を、息子の友人に実際に作曲してもらい、譜面を掲載するつもりだったようですが、トリックが暴かれるおそれがあるので断念したといひます。この幻の曲に秘められた謎は、作品の最後で金田一耕助に「真赤に焼けた鉄串を、脳天からぶちこまれたやうなショック」を与えます。謎の真相については、ぜひ一読を。

世田谷文学館 学芸員 原 辰吉

世田谷文学館 2019年度後期コレクション展「新青年」と世田谷ゆかりの作家たち」では『悪魔が来りて笛を吹く』草稿ほか横溝正史関連資料を多数展示中。企画展「六世 中村歌右衛門展」も同期開催。2020年4月5日(日)まで。



『悪魔が来りて笛を吹く』
(1954年・岩谷書店)